

第1章 日田市の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) 位置

本市は、北部九州のほぼ中央にあたる大分県の西部に位置し、東は玖珠郡玖珠町、熊本県阿蘇郡小国町、西は福岡県朝倉市、うきは市、八女市、南は熊本県菊池市、山鹿市、阿蘇市、阿蘇郡南小国町、北は中津市、福岡県朝倉郡東峰村、田川郡添田町と接している。平成17(2005)年3月22日に天瀬町・大山町・上津江村・中津江村・前津江村との合併により、東西24.88km、南北48.63km、面積666.19km²となった。



図3 本市の位置(広域)

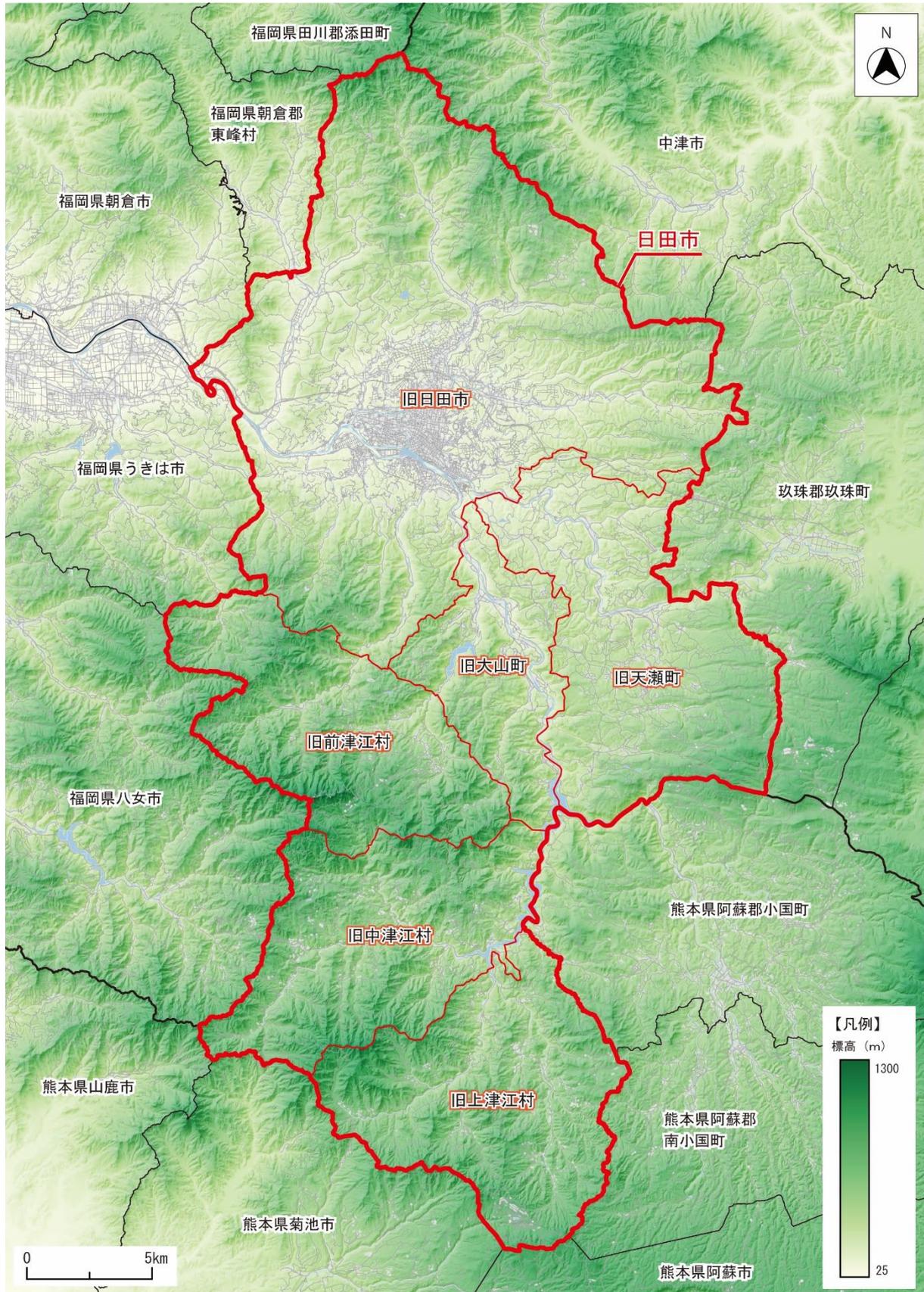


図4 本市の位置(拡大)

(2)地形

本市は周囲を阿蘇・くじゅう山系や英彦山系^{ひこさん}の山々に囲まれ、こうした山系から流れ出る豊富な水は、大山川^{おおやまがわ}や玖珠川^{くすがわ}、花月川^{かげつがわ}などを流れて日田盆地で合流し、三隈川^{みくまがわ}(筑後川^{ちくごがわ})となって、筑後・佐賀平野を貫流し、有明海へと流れ込んでいる。

この三隈川が貫流する本市の中心部は、周囲を阿蘇4火砕流によって形成された標高110～140mの平坦な台地が巡る盆地となっている。この時の火砕流は、時速100km以上のスピードで瞬く間に森の木々をなぎ倒し、谷や盆地を覆い尽くしたと考えられている。小野川や有田川では、この時になぎ倒されて運ばれた樹木群が川底からまよって発見されており、火砕流の凄まじさを伝えている。現在の市街地である盆地底の沖積地は標高80m前後であり、盆地内には日隈^{ひのくま}・月隈^{つき}・星隈^{ほしくま}と呼ばれる残丘が転々と残っている。また、この盆地内にはいくつかの小河川が流れ込み、こうした河川流域は谷底平野を成している。

周辺の玖珠川や大山川の流域では、崖状の深い谷地形が形成されている。そのため、玖珠川流域では、その右岸に広がる五馬台地^{いつまだいち}を流れてきた小河川が合流付近で滝となっている。また、桜竹や赤岩を中心とした河川敷には、単純硫黄の温泉源が自然湧出しており、源泉は古くから天ヶ瀬温泉の名で知られるなど、この地域特有の景観となっている。

日田盆地の南部には、釈迦岳^{こぜん}や御前岳^{とがみ}、渡神岳^{しゅてんどうじ}、酒呑童子山など標高1,000mを越える山々が連なり、津江山地と呼ばれている。津江山地では火山活動が始まる前にくぼ地ができ、そこに湖ができた。この湖の跡が上津江町に見られる星原層^{ほしはら}と考えられ、ヒノキ科の化石が産出している。一方、津江山地の火山活動に伴ってその地下ではマグマによる熱水作用を受け、鯛生金山のもととなる金銀鉱床^{こうしやう}が形成されていった。

天ヶ瀬温泉
日隈・月隈・星隈

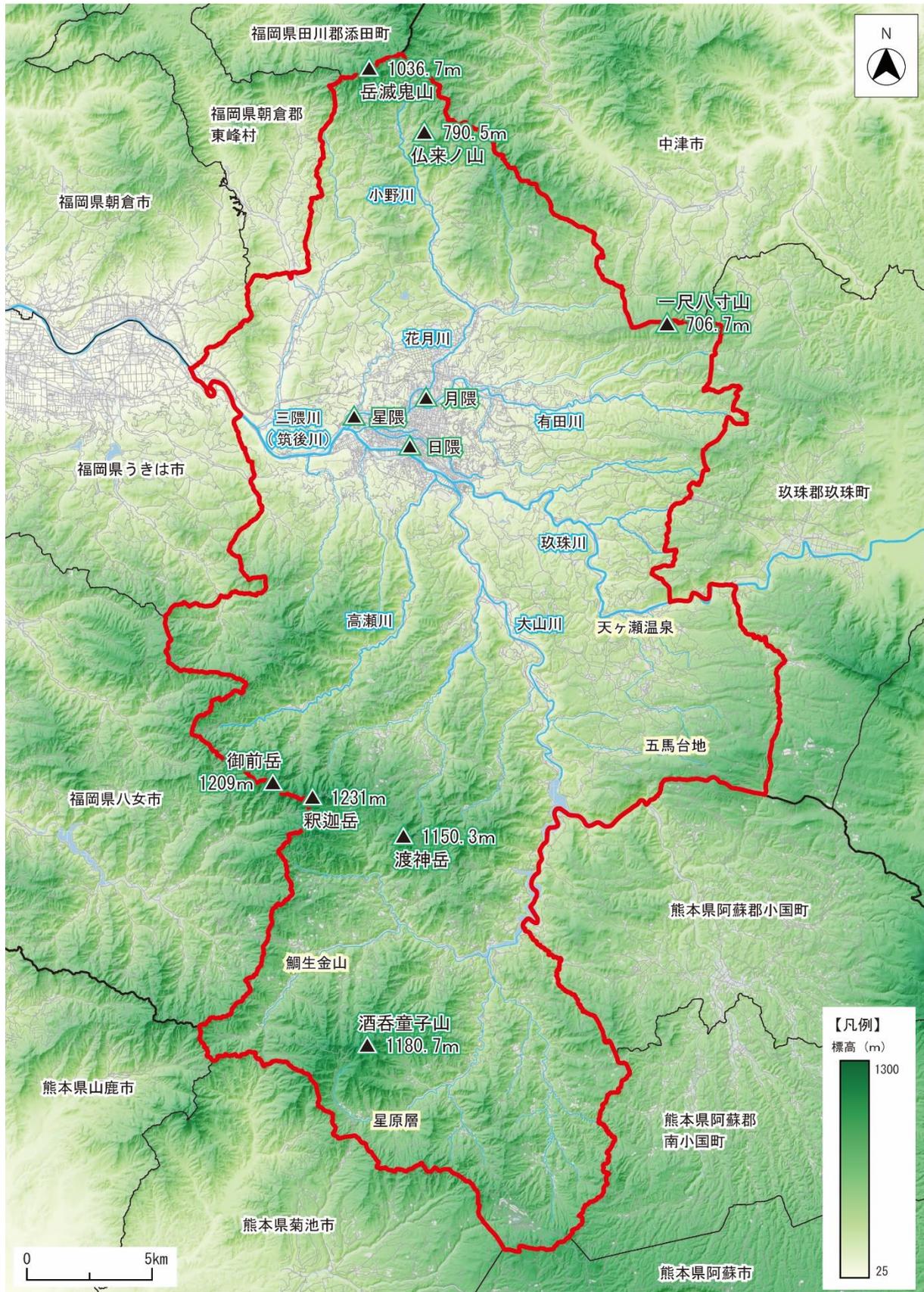


图5 地形图

(3)地質

本市中心部の日隈山や会所山などの丘陵は、津江山地で見られる輝石安山岩からなり、日田盆地内でこの岩石が見られるのはこの2か所のみである。

市南西部の前津江町柚木や北部の殿町小野川河床では、今から3億～2億7千万年前の結晶片岩(黒色片岩)と呼ばれる変成岩(三郡変成岩)が見られ、上津江町の兵戸峠や川原川上流部では、中世代白亜紀(1億2千万～9千万年前)に変成岩を貫入して地上に噴出してきた岩石と考えられている花崗岩の露頭が見られる。これらの変成岩や花崗岩は、日田地域の基盤岩となっている。

北西部の大肥本町白岩や南部の上津江町兵戸峠では、古第三紀始新世(約4,500万～4,000万年前)に地球規模の温暖化の進行によって、大陸の一部が海に沈んだことを示す地層が見られる。

北部の小野川上流域(源栄町・殿町)や鶴河内川上流域(鶴城町)では、山国累層(760万～610万年前)と名付けられ、緑灰色をした変朽安山岩(プロピライト)が広く分布している。同じく南部の中津江村鯛生から西部の前津江町柚木一帯にかけても暗灰色をした変朽安山岩が分布し、ここでは鯛生層群(760万～610万年前)と名付けられている。源栄町にある小鹿田焼の陶土原料となる原土は、後の火山活動によって高温に熱せられた地下水が上昇し、変朽安山岩を蒸したことによって陶土に適した土へと変化したと考えられている。

小野川中流域から大肥川・鶴河内川流域周辺には、凝灰角礫岩や火山円礫岩、軽石凝灰岩などで構成された北坂本累層(610万～520万年前)と名付けられた地層が山国累層を覆うように分布している。この北坂本累層によって作られた自然景観は耶馬溪と呼ばれ、本市では中津市との境にある一尺八寸山の一部が国の名勝に指定されている。

西部の夜明ダム付近から北部の畦倉山や大日ヶ岳(福岡県東峰村)、英彦山、岳滅鬼山、仏来ノ山などの山々は北坂本累層を覆うように鮮新世輝石安山岩(470万～340万年前)が広く分布している。

三隈川から南部、大山川より西部の釈迦岳や御前岳、渡神岳、酒呑童子山などの津江山地の山々は、今から360万年前頃から久留米―日出線より南側、大分―熊本構造線(中央構造線)より北側の範囲で大規模な隆起が起り、その中でマグマによる火山活動が活発となって輝石安山岩を中心とした溶岩が噴出してできた。

大山川より東部は五馬台地と呼ばれ、100万年前に玖珠盆地付近より噴出した耶馬溪火砕流堆積物に亀石山や万年山などから噴出した溶岩が覆い、平坦な台地が広がっている。この耶馬溪火砕流堆積物は日田盆地東部を中心に広く分布し、日田盆地西部の高井町川下まで及んでいる。

大山町一帯では、大山川による浸食で流れ込んだ土砂が堆積したとみられる大山層(77万～36万年前)と呼ばれる泥岩が見つかる。この泥岩の中からは淡水魚や二枚貝、昆虫、植物化石などが多く発見されている。近年で

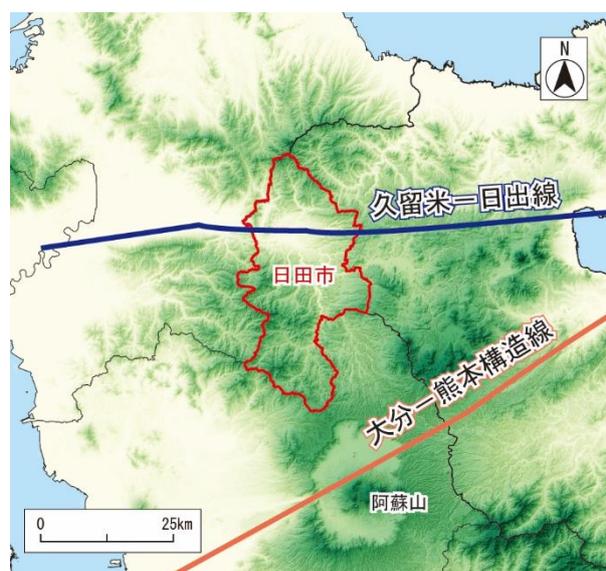


図6 日田市周辺の地体構造図

《資料5》

は、サイヤワニ、シカといった動物の足跡化石が発見されたり、珪藻化石から新種のステファノディスクスビタエンシス(和名ヒタトゲカサケイソウ)が発見されたりした。

日田盆地の周囲の台地の崖などには、凝灰岩の地層が見られる。この地層の多くは、27万年前に火山活動を開始した阿蘇山の、爆発的噴火(9万年前)により堆積した阿蘇4火砕流堆積物と考えられている。この中の樹木群が、小野川の阿蘇4火砕流堆積物及び埋没樹木群として国の天然記念物に指定されている。

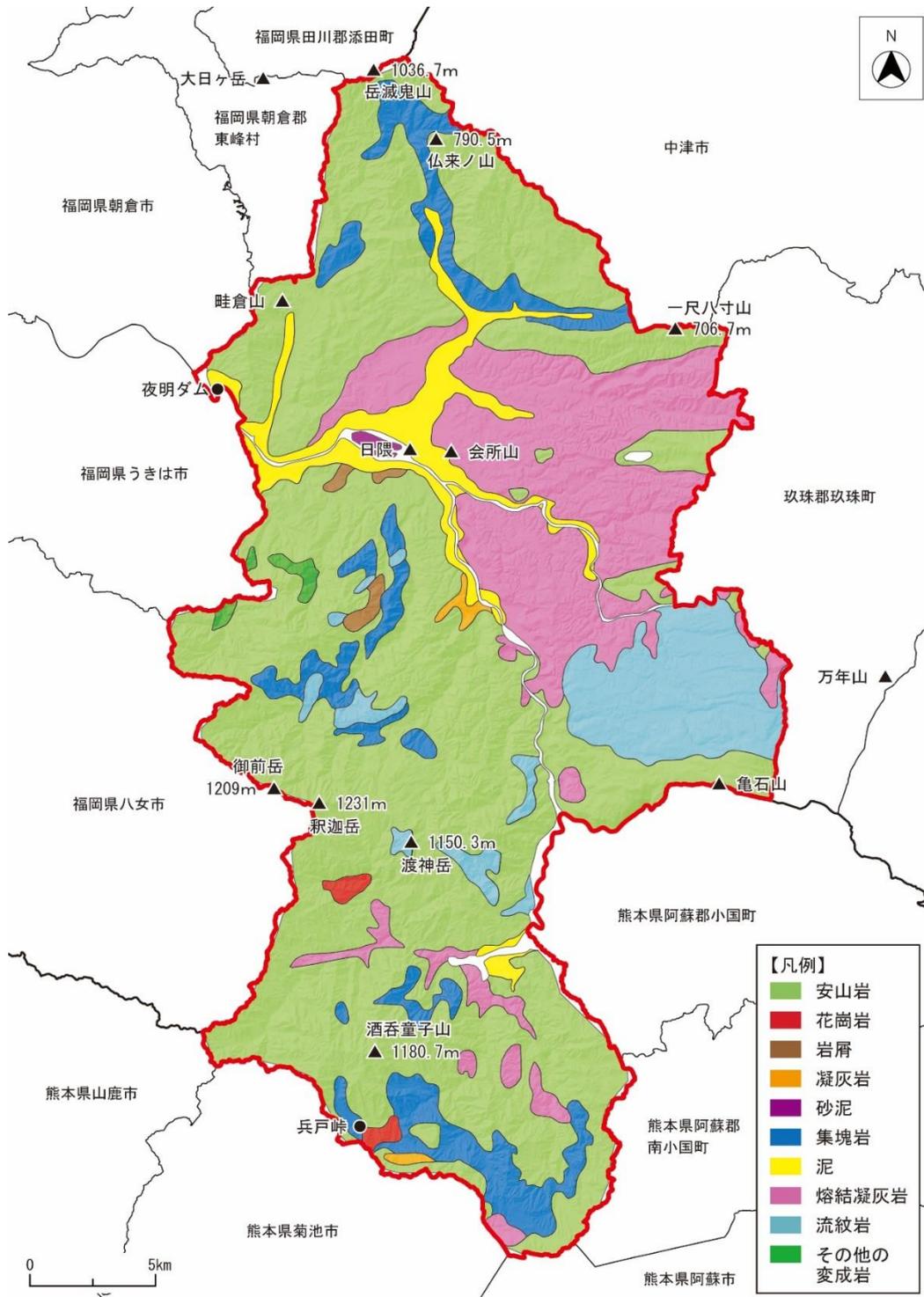


図7 地質図

(4)気候

本市は地理的にほぼ九州の中央部に位置しているため、内陸型気候であると言われ、夏は暑く、冬は寒い。周辺に中小河川が縦横に走っていることと、放射熱が夜間急激に上空に飛散することから、秋から冬にかけて底霧^{そごぎり}の発生をみることが多い。内陸特有の性質から昼夜の気温差が大きく、また夏季は雷をともなう騒雨(にわか雨)性の降雨が発生する。風は地形の影響で西又は西北西の風が多く、風速は比較的弱い。年平均気温は 15.4℃、年間降水量は 1,810.4 mm、年平均湿度は 74.0%で比較的温暖多湿の気候といえる。



また、山間部にあたる前津江町の降水量は 2,853 mmとなっており、平地部と比較して多くなっているのは、高い山々に雲がぶつかりそこに停滞して多くの雨を降らせることが原因とみられている。この日田地方特有の気象は、山林地帯にスギ・ヒノキの成長を盛んにし、全国屈指の林業地日田を作り出した。

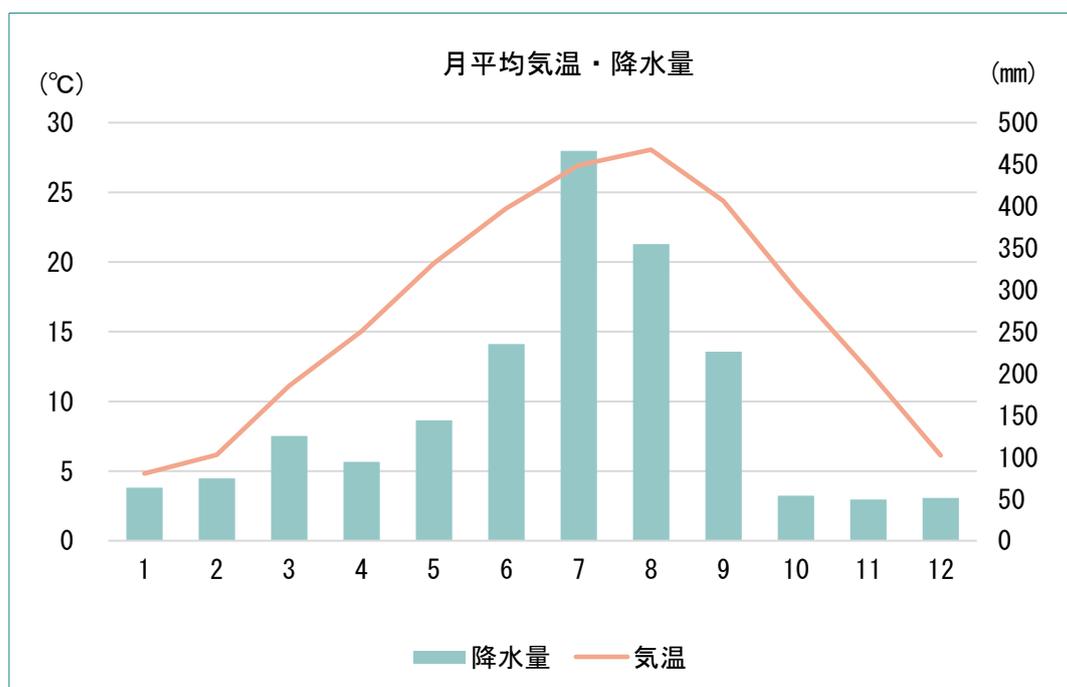


図8 平成30(2018)年から令和4年(2022)年の月平均気温・降水量

資料：気象庁

(5)生物

①植物

本市は、標高の最も高い釈迦岳で 1,231m、最も低い夜明関町で 38m とその高低差はおよそ 1,200m にも及ぶ。大分県の植生垂直分布によれば、標高 1,000m を超える所は山地帯と呼ばれ、ブナ林が発達している。ミヤマキリシマなどの高山植物も見られ、天瀬町の亀石山山頂(標高 942m)には大群落がある。

ミヤマキリシマ

標高 800~1,000m の低山地帯ではアカガシ林やモミ・ツガ林が発達し、標高 400m 以上の丘陵地では、ウラジロガシやスダジイを中心とした自然林が見られる。そして、標高 400m より低い低地では、アラカシやコジイ林が点在している。

日田地域では、江戸時代後期からスギの植林が始まり、特に明治時代以降は植林面積が増加した。現在の森林面積の約 83% はスギ・ヒノキの人工林で占められている。また、シイタケの駒をクヌギに打ちこむ原木椎茸の生産が盛んで、天瀬町を中心にクヌギ林が目立っている。

釈迦岳や御前岳、渡神岳、酒呑童子山など標高 1,000m を越える山岳が連なる津江山系には、山頂や渓谷沿いにブナ、ミズナラ、シオジなどの原生林が残っており、こうした自然林が清流を生み、ツリフネソウなど 800 種以上の植物や昆虫類、鳥類、哺乳類などを自生、生息させていることから、現在、津江山系の 16,246ha が津江山系県立自然公園として保護されている。

②動物

日田地域の自然豊かな森には、シカやイノシシ、タヌキ、テン、ムササビをはじめ、多くの野生動物が生息している。国の天然記念物のニホンヤマネは、平成 21(2009)年に源栄町で初めて発見されて以降、平成 30(2018)年に中津江村で 1 例、令和 2(2020)年に前津江町で 2 例、令和 3(2021)年に上津江町で 1 例発見されるなど近年発見例が相次ぎ、これまでに 5 例が確認されている。一方で、外来種のアライグマが津江山地をはじめ市内で多く確認されており、在来種への影響が懸念されている。

ニホンヤマネ

高低差がある日田地域では、標高の高い渓流域にはヤマメやタカハヤ、アカザ(環境省・大分県絶滅危惧Ⅱ類)のように低い水温を好む淡水魚類が生息している他、両生類のブチサンショウウオ(環境省・大分県準絶滅危惧)も見られる。低地部では、大山川や三隈川、花月川などでオヤニラミ(環境省絶滅危惧Ⅱ類)やカワムツ、オイカワ、ムギツク、ウグイ、カワヨシノボリ、フナ、コイ、ドンコのほか、筑後川水系にのみ生息しているアリアケギバチ(環境省準絶滅危惧・大分県絶滅危惧Ⅱ類)などが生息している。

水田を潤す用水路や小河川など流れが緩やかな場所では、ミナミメダカ(環境省絶滅危惧Ⅱ類)、カゼトゲタナゴ(環境省・大分県絶滅危惧ⅠB類)、アブラボテ(環境省準絶滅危惧種)、スナヤツメ(環境省絶滅危惧Ⅱ類・大分県絶滅危惧ⅠB類)が棲息している。かつて市内に数多く棲息してい

たニッポンバラタナゴ(環境省絶滅危惧ⅠA類)やカネヒラなどは近年見られなくなった。また、市内では昔から水田や水路で見られていた爬虫類のニホンイシガメ(環境省準絶滅危惧)の発見例も少なくなってきたおり、保護が必要である。

川の多い日田地域では水生昆虫も数多く生息しているが、最も一般的に知られている水生昆虫がホタルである。市内で見られるホタルの種類は、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタル、オオマドボタルであるが、近年その数が激減してきており市民の間で幼虫時代を水の中で過ごすホタルを増やす努力が続けられている。また、かつて水田にたくさん見ることができたタガメやゲンゴロウは、近年発見例がなく、市内から姿を消したのではないかと考えられている。

水路や小河川には、カワニナやシジミ、カラスガイやイシガイ、マツカサガイなどの二枚貝類も生息している。とくに淡水二枚貝類はかつて市内の小河川や水路で多く見ることができたが、近年は豆田町を流れる水路にかろうじて見ることが出来る程度に激減している。

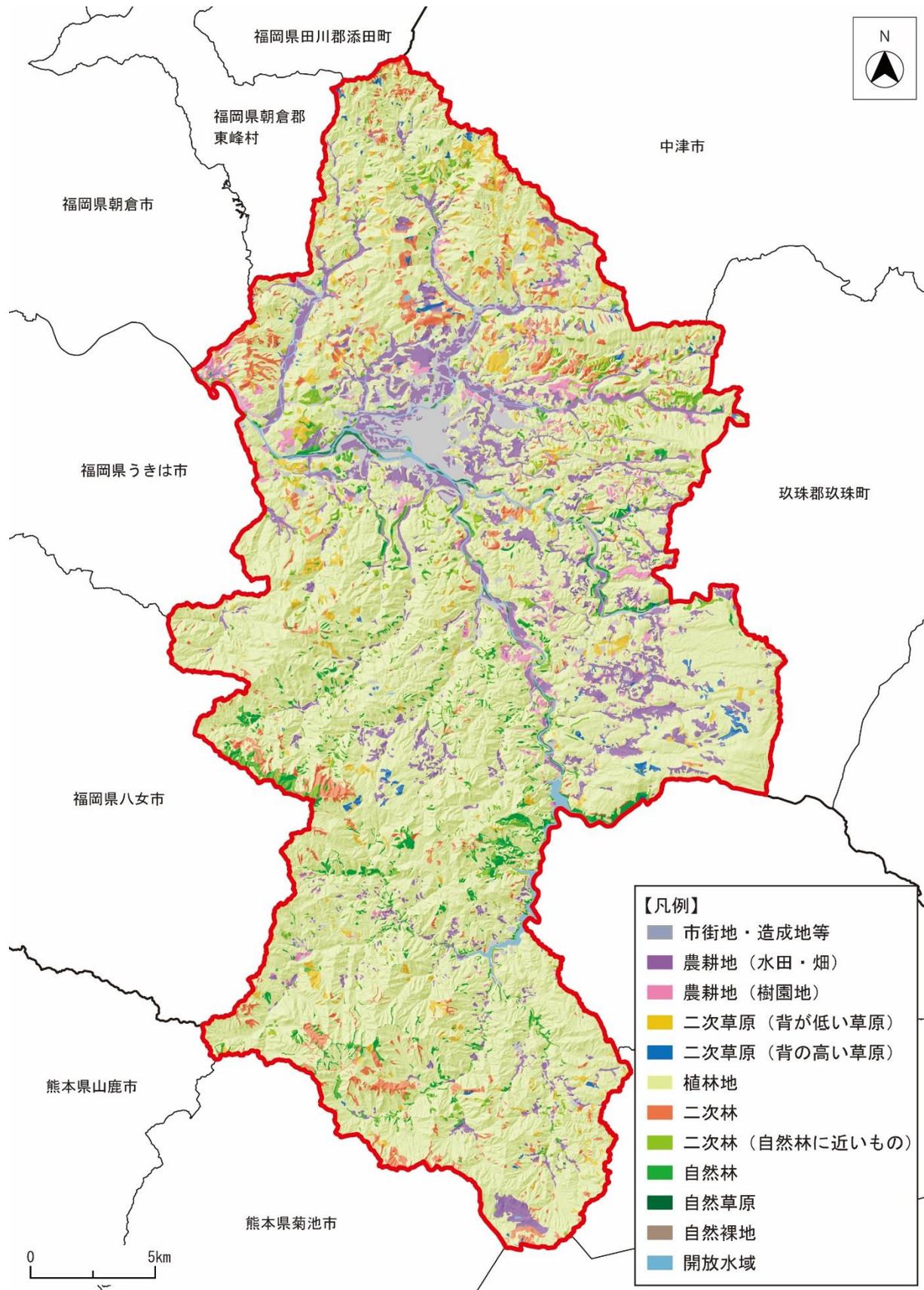


図9 植生図

2. 社会的環境

(1)人口

本市の人口は減少する傾向にあり、平成17(2005)年の市町村合併によって74,165人と増加したものの、令和2(2020)年に実施した国勢調査の結果では62,657人と合併以降も人口の減少は続いている。

年齢構成をみると、0～14歳の幼年人口12.4%、15～64歳の生産年齢人口は51.6%、65歳以上の老年人口は35.7%となっている。特に、高齢化の進展は全国的な傾向であるものの、全国平均28.0%を上回り本市の急速な高齢化がうかがえる。

また、国立社会保障・人口問題研究所の算出方法に準拠した国のデータによると、令和7年(2025)に本市の人口は6万人を割り込み、さらに令和27年(2045)に39,297人となる見込みである。

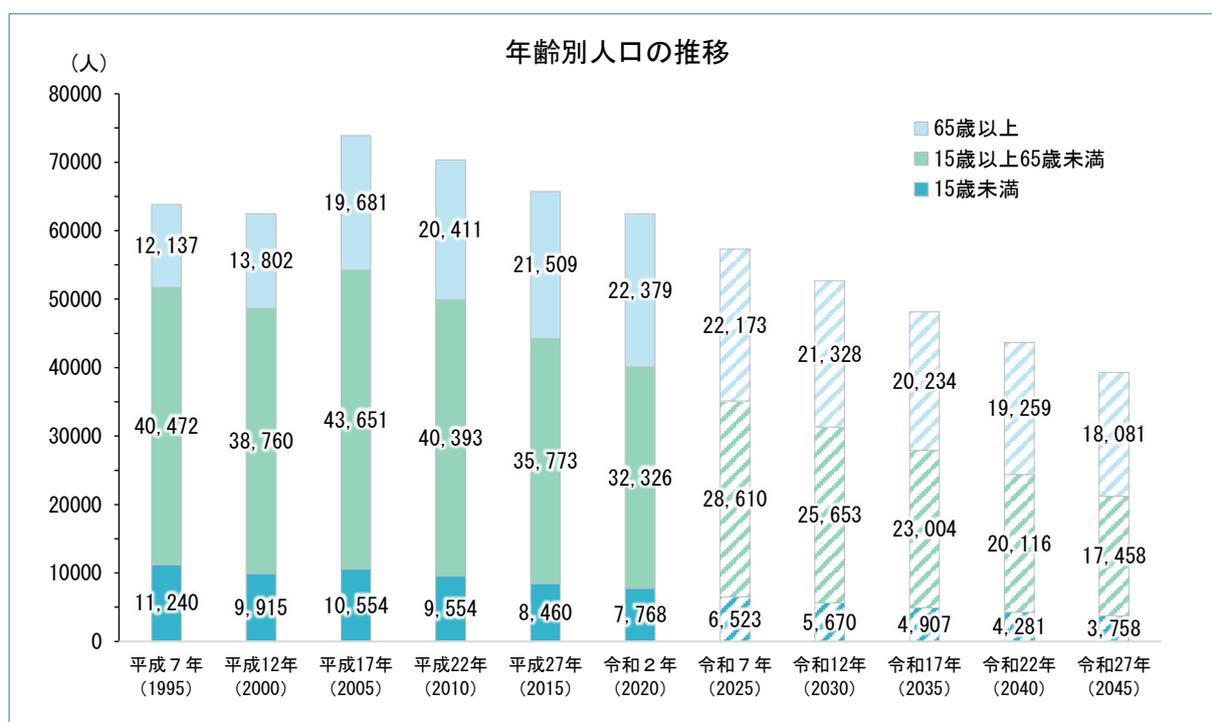


図10 日田市の年齢別人口の推移

資料：総務省統計局「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

(2)産業

本市では、平坦地から準高冷地までの多様な地形と気候を生かした農業が行われている。基幹となる作物は水稻であり、台地開発を積極的に推進した野菜、果樹、畜産の産地化も図られている。しかし、1戸当たりの耕地面積は少なく、自給的農家や兼業農家の割合が高いことが特徴となっている。また、兼業農家数の減少も大きく、65歳以上の農業従事者が全体の6割を超えるなど、高齢化が顕著に見られる。水産業については、豊かな水資源を生かした内水面漁業と観光資源としての活用を図っている。また、林業については、日田地方の気象は樹木の生育に大変適しており、江戸時代以降から日田下駄、家具、漆器などの木工業も盛んに行われ、林業の町“日田”と呼ばれるようになっていた。しかし、木材需要の低下、生産コストの高騰による採算性の悪化、原木価格の低迷等に伴い、近年では生産活動の停滞が見られる。

本市の工業では、「水郷日田」と称されるように豊富な地下水脈が活用され、これまでサッポロビール株式会社、三和酒類株式会社や株式会社九州コクボをはじめ、市内の酒類製造業、清涼飲料製造業の稼働により、飲料産業の製造品出荷額は本市においても大きなウェイトを占めている。

小鹿田焼
日田下駄
木工品

また、かつて天領であった本市では、先述した日田下駄をはじめとする様々な伝統工芸が花開き隆盛していった。宝永2(1705)年に開窯した小鹿田焼(国無文)は今も一子相伝で作り続けられている。

本市の就業人口総数は、人口減少や長引く景気の低迷、消費の広域的な流出など、厳しい経済状況を受け、減少傾向にあり、令和2(2020)年に実施した国勢調査の結果では31,552人であった。また、産業別に見ると、第3次産業への従事者が大部分を占めており、第1次、第2次産業の従事者が少ない現状にある。

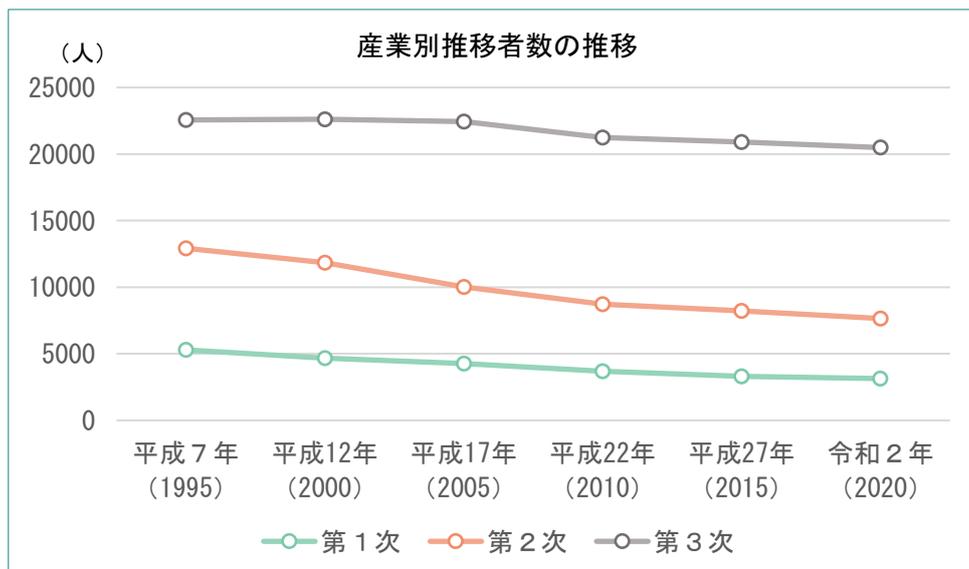


図11 産業別就業者数の推移

資料：総務省統計局「国勢調査」

(3)観光

本市は、古くから北部九州の各地を結ぶ交通の要衝として栄え、江戸時代には幕府直轄地・天領として西国筋郡代の御役所が置かれるなど、九州の政治、経済、文化の中心地として繁栄し、当時の歴史的な町並みである豆田町や小鹿田焼などの伝統文化が今なお脈々と受け継がれており、これらは重要な観光資源となっている。また、毎年夏に行われる日田祇園祭では、江戸時代から作られるようになった豪華絢爛な山鉦が隈・竹田地区や豆田地区を巡行し、毎年多くの人を訪れている。

昭和 25(1950)年、耶馬、日田、英彦山が国内初の耶馬日田英彦山国定公園に指定され、昭和 36(1961)年には、水と緑と温泉のまちとして、三隈川での情緒を満喫できる遊船での宴と鶴飼の鑑賞を中心とした観光振興に取り組んできた。

以来、観光業は、本市における重要な産業として、地域経済の活性化に欠かせないものとなっている。

その他、本市には文化財だけでなく、歴史ある天ヶ瀬温泉などの温泉や鯛生金山の坑道探検をはじめとする地底探検、上津江フィッシングパークをはじめとする自然のテーマパークなど、バラエティ豊かな観光施設や見所が数多く所在する。

平成 30(2018)年には、外国人旅行者が宿泊者の 3 割を占めるようになるなど、本市の観光産業にとって大きな転換期を迎える中、今後も、豊かな自然や歴史・文化など、様々な特色ある資源をさらに磨き上げるとともに、埋もれている資源を掘り起こし、これらを相互に連携・活用していくことで、新しい人の流れをつくり、地域全体の活性化を図っていくことが求められている。

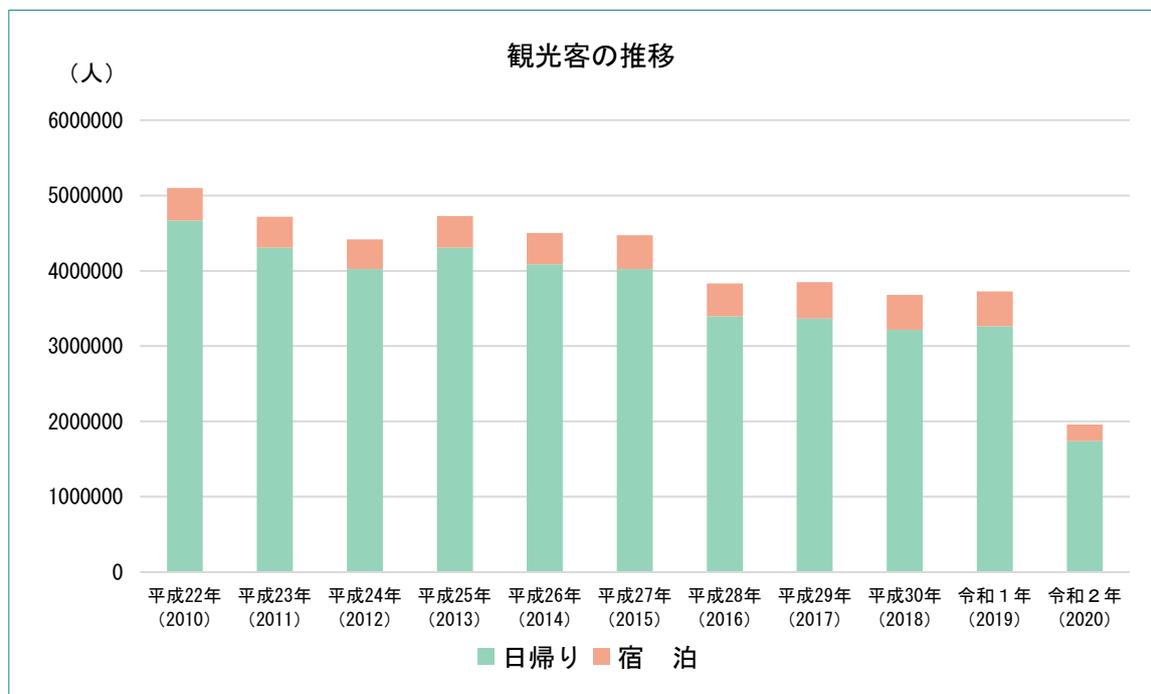


図 12 観光客数の推移

資料：日田市『日田市八十年史』

(4)土地利用

本市の総面積 666.19 km²のうち、約 80%が山林や竹林などで構成されており、日田地域の標高 200m 未満の平坦地は、市街地や水田に利用されている。また、天瀬地域南部の台地上の平坦地や緩傾斜地は、集落地や水田、牧場等に利用されている。

また、本市には総面積の 9.9%にあたる 66.25 km²の区域面積を有する日田都市計画区域が指定されている。用途地域として、中央部の平坦地に総面積の 1.9%にあたる 12.44 km²が定められており、第二種低層住居専用地域と工業専用地域を除く 10 の地域が指定されている。

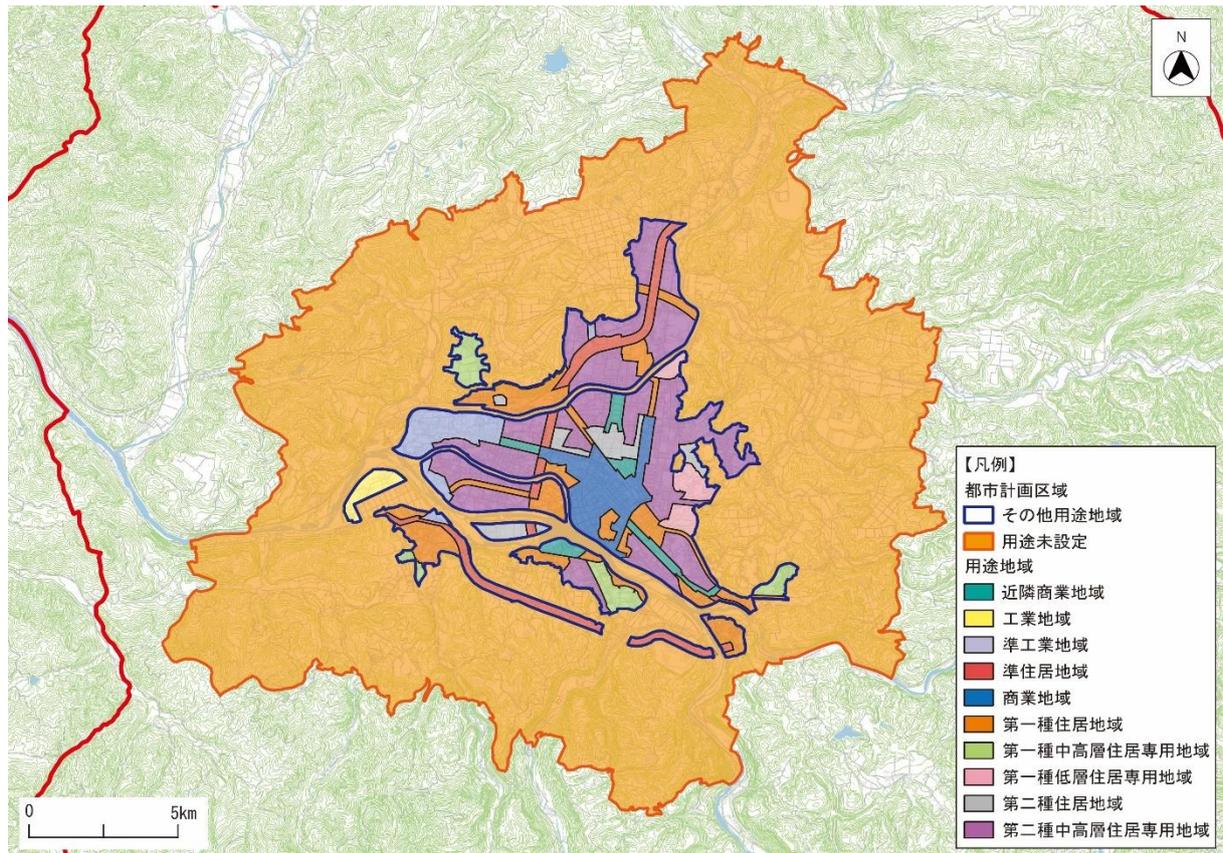


図 13 都市計画図

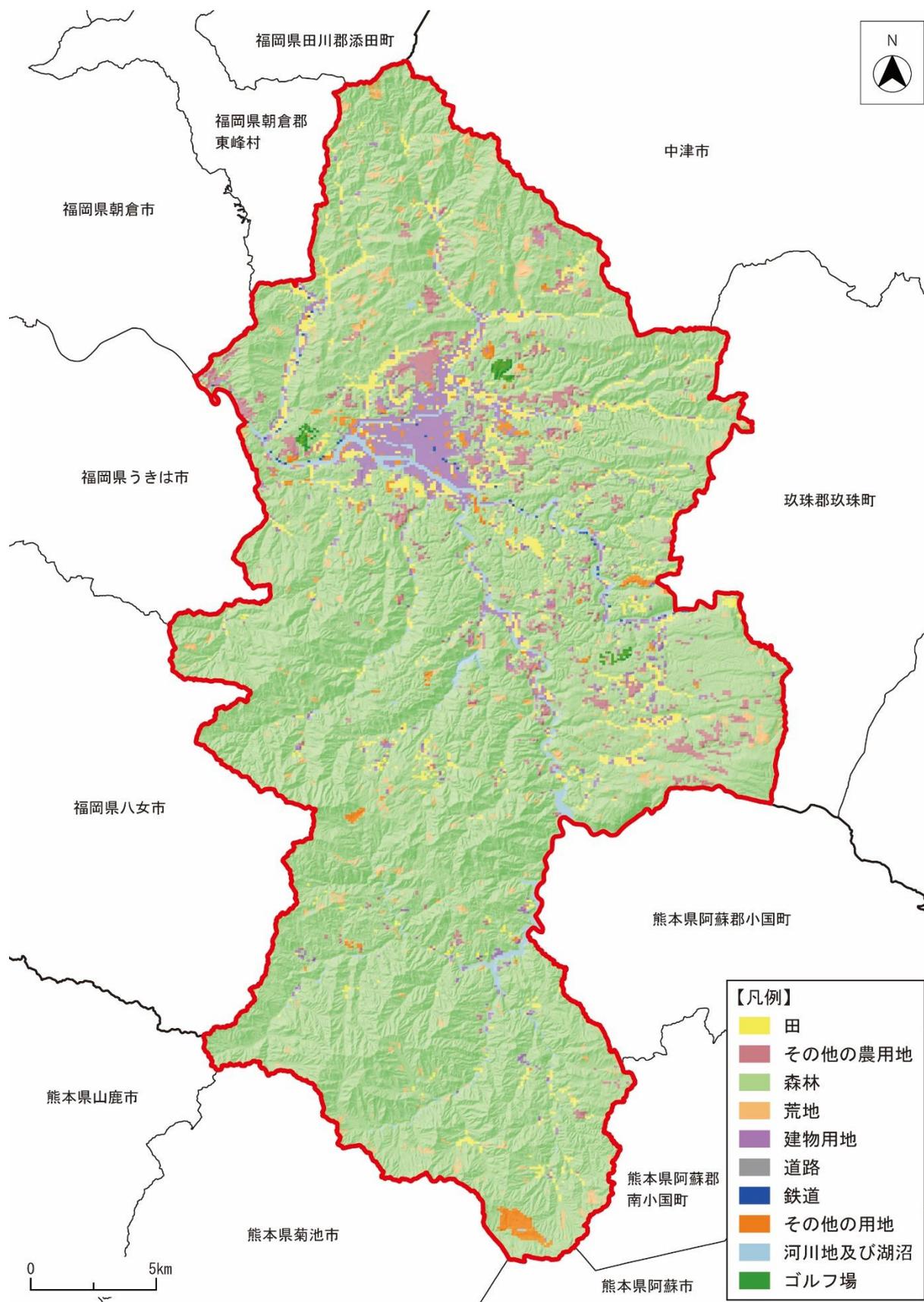


図 14 土地利用図

(5)交通アクセス

本市は九州の中心に位置することから、アクセス面において結節点のような役割を果たしており、高速道路を利用すれば、福岡市や熊本市、大分市などの各種主要都市までの所要時間はおよそ1時間となる。

本市の交通網についてみると、大分から久留米間のJR久大本線、日田から小倉間のJR日田英彦山線が通じ、主要幹線道路は国道210号、386号、211号及び212号の4本の交通幹線がそれぞれ放射状に福岡、北部九州の主要都市に通じている。さらに高速道路、九州横断自動車道長崎大分線大分自動車道の開通により県北西部における産業、経済の流通網を確立している。



図 15 交通アクセス図

3. 歴史的環境

(1) 通史

① 人々の生活と交易の始まり

本市の歴史は、日田盆地の南東に広がる五馬高原で確認された高瀬Ⅲ遺跡の焚火跡などから34,000年前に遡ることができる。五馬高原周辺では狩猟や採集生活を送っていた亀石山遺跡などの多くの旧石器時代の遺跡が発見されており、約20,000年の間その地で生活をしてきたことが分かる。

約12,000年前頃に始まる縄文時代では、早期・前期・中期の遺跡が五馬高原などで見つかるなか、日田盆地内でも大肥川や大山川流域などで遺跡が見つかるようになる。これらの遺跡からは、漁撈に使用した石錘なども見つかり、狩猟や採集のしやすい山地だけではなく、食料を確保しやすい川の近くにも生活域が広がったと考えられる。そして、後期になると大山の中川原遺跡や三芳の上井手遺跡など盆地を中心とした河岸段丘の各所で遺跡が発見されるようになるが、晩期になると遺跡の数は極端に減少し、実態は明らかになっていない。

稲作に代表される弥生時代は、中国や朝鮮半島を中心に石包丁などの磨製石器や鏡・武器類などの青銅器、鉄器といった大陸文化が流入し、縄文時代から飛躍的な成長を遂げることとなった。こうした文化の先進地は大陸に面している福岡県や佐賀県であったが、これらの地域と地理的に近い日田にも先進地域の文化が伝来するようになる。本格的な弥生文化の日田地方への伝播は、小迫辻原遺跡(国史跡)、吹上遺跡(県史跡)、徳瀬遺跡などの出土品から弥生時代前期後半には始まると考えられている。当時の集落は河川流域や台地上に営まれ、また集落の近くには墓地も造られた。河川流域に営まれた徳瀬遺跡では北部九州の影響を受けた弥生土器や石器などが出土し、また、大肥遺跡では木製農具や農業用堰などが発見されており、日田で北部九州と同時期に稲作が始まったことを示している。さらに、弥生時代中期には、日田の地を統率する首長が登場するようになる。日田盆地を見下ろす台地上に位置する吹上遺跡では、甕棺墓から銅剣やヒスイ製の勾玉、ゴホウラ製貝輪などの豪華な副葬品が見つかり、地域を治める有力者がいたと考えられている。このような吹上遺跡出土品(国重文)に象徴されるように北部九州との密接な関係が構築されていたことがわかる。そして、弥生時代の終わりごろになると、長者原遺跡や三和教田遺跡などの環濠をもつ集落が登場し、日田の各地で大規模な集落が営まれるようになる。

古墳時代前期、日田の中心集落は環濠をもつ居館跡が見つかった小迫辻原遺跡となった。古墳時代中期になると、薬師堂山古墳や姫塚古墳、丸山古墳などといった円墳が築造されるようになり、筑後川を通じた北部九州との交易から、求来里川流域の集落群では竈がいち早く付設され、盆地内の河川沿いで鉄器が生産されるようになった。

古墳時代後期には、本市最大の前方後円墳である朝日天神山古墳群(県史跡)のほか、ランドヤ古墳(国史跡)や穴観音古墳(国史跡)、法恩寺山古墳群(国史跡)といった装飾古墳が造営されるようになる。いずれも筑後川流域沿い、あるいは西への陸路にあたる場所で、日田を治める各地域の首長が交通の要所を支配していたことを示している。

吹上遺跡出土品
ランドヤ古墳
穴観音古墳
法恩寺山古墳

②律令国家と日田郡の成立

大宝元(701)年に大宝律令が制定された後、国郡里制が定められ、現在の本市域とほぼ同じ「豊後国日田郡」が成立した。「日田」という名は、景行天皇が巡幸した際に、この地で久津媛という神が人と化して迎えたことから久津媛郡と名付けられたのが訛ったと言われている。この豊後国の支配には中央から派遣される国司があたり、日田郡の支配には在地の有力豪族の中から選ばれた郡司(日下部氏)があたった。さらに、日田郡は「石井」「鞆編」「在田」「日理」「夜關」の5つの郷に区分され、中央につながる道路や乗り継ぎのための馬と宿泊施設を備えた駅などが整備された。

日田郡内の律令期の姿を想像させる遺跡は多数発見されており、大型柱列や建物群、墨書土器や硯、瓦などが出土した大波羅遺跡は、郡衙などの日田郡の役所と想定されている、また、建物群や郡司職の名称である「大領」銘の墨書土器が出土した小迫辻原遺跡は、郡司の館と考えられている。そのほか、上野第1遺跡では道路や倉庫群とともに「豊馬豊馬」と線刻された石製品が出土し、「石井駅」の候補地とされている。

小迫辻原遺跡
上野第1遺跡

③中世社会と大蔵氏の栄華

古代において日田を支配していた日下部氏に代わり、中世の武士階級を代表し日田を掌握する郡司職については大蔵氏である。大蔵氏は名目上の支配者だったばかりでなく、実質的にも各地域に配置した同族及び他豪族を統合して、西豊後に一大勢力を築いていた。その初期には中央の貴族に従属し、権力の庇護を頼みながら勢力を確かなものにし、後期には豊後守護の大友氏に従いながらも独立を確保していた。

大蔵氏の出自については定説がなく、明確でない。しかし、確実に歴史上に存在するのは「日田どん」と呼ばれる大蔵永季からである。永季は天喜4(1056)年に生まれたと伝えられており、朝廷の相撲節会の記録によると、延久3(1071)年にこの相撲節会に初めて召し出された際、順調に勝ち上がって、見事に決勝で出雲の「小冠者」に勝利したとあり、その後35年間、15回にわたって節会に出場したが、一度も負けなかったといわれる。その後、『豊後国日田郡司職次第』によると、長寛元(1163)年大蔵永宗のとき、日田郡司職をめぐる一族内の争いを防ぐため、領地を鳥羽上皇建立の金剛心院の荘園として差し出し、大蔵氏の日田郡支配を確固たるものにしたといわれる。

日田どんに関する文化財

大蔵氏は建久5(1194)年に鎌倉幕府から日田の地頭に任じられ、日田の領主となった。弘安8(1285)年に整理された『弘安図田帳』では、日田郡は560町のうち、日田荘500町、大肥荘60町(大宰府安楽寺領)となっており、日田荘のほとんどを大蔵氏の一族である地頭職の日田永基が支配していた。この大蔵姓日田氏は、南北朝時代には北朝に味方し、室町幕府4代將軍の足利義持の奉公衆にも選ばれていることから、幕府とのつながりをうかがえる。その後、文安元(1444)年に家督争いが起こり、この日田氏は断絶してしまっただが、豊後国守護であった大友氏から養子

を迎えて、大友姓日田氏を再興した。しかし、天文17(1548)年に、日田親将^{ちかまさ}が大友氏本家の20代当主である大友義鑑^{よしあき}に対する謀反を計画したことが露見し、大友姓日田氏も断絶してしまった。文禄2(1593)年に豊臣秀吉により太閤蔵入地になるまで、坂本^{さかもと}・財津^{さいつ}・羽野^{はの}・石松^{いしのみ}・高瀬^{たかせ}・佐藤^{さとう}・堤^{つみ}・世戸口氏^{せとぐち}らが郡老として日田の地を支配することになった。

大蔵氏は慈眼山^{じげんざん}に城を構えて本拠地としており、慈眼山周辺には「高城」「古城」といった古い地名が残っている。また、山麓には大蔵氏に関連する遺跡が広がっており、出土した遺物には当時の人々が使った素焼きの土器のほか、博多を介した中国との貿易を示す輸入陶磁器や渡来銭、鞘や刀といった武士所縁の物や箸・杓文字などの生活用具、碁石や独楽などの遊具など多彩な遺物が出土しており、中世日田の往時の様相や実態を知る手がかりとなっている。

永興寺
岳林寺

一方、慈眼山の中腹には、大蔵永季が父永興^{ながおき}を供養するために延久年間(1069~1073)に建立したといわれる永興寺^{ようこうじ}がある。現在平安~鎌倉時代に京都や奈良の仏師によって造られた仏像群が収蔵庫に残されており、日田一帯を治めた大蔵氏の栄華と財力を今に伝えている。また、大蔵氏に関係する寺社に康永元(1341)年に10代当主の大蔵永貞^{ながさだ}が元の渡来僧を開基として創建した岳林寺^{がくりんじ}がある。中世に造られた仏像や絵画が今も残っており、大蔵氏の後期の隆盛を顕示して見せている。

④古代・中世を生きる人々の信仰

本市では中世以前から様々な信仰が行われてきた。平安時代では、薬師信仰や観音信仰が行われ、酒楽神社^{しゅらく}にある薬師三尊や永興寺にある観音菩薩像などが当時の信仰の姿を伝えている。また、大山町では、原始仏教の教説を説いた「華嚴経^{けごん}」「大集経^{だいじつ}」「大品般若経^{だいほんはんにゃ}」「法華経^{ねほん}」「涅槃経^{ねはん}」という五部大乘経^{ごぶだいじょうきょう}の写経が残されており、この地に天台宗に關係する寺院があったことがうかがえる。

また、山岳信仰も盛んに行われてきた。英彦山は古くから神の山として信仰されていた霊山で、中世になると、神仏習合され、修験道の道場として栄えるようになった。本市にある烏宿山^{からすどまりやま}も女人禁制の霊山として昔から山岳信仰の対象となっていた霊山で、山頂に山岳信仰を伝える大山烏宿神社が鎮座している。この他にも、日田周辺には仏教に関連した名前の山々があり、山岳信仰の名残と考えられている。

指定された石造物

本市には鎌倉時代から急速に造られるようになる五輪塔や笠塔婆^{かさとうば}、石仏^{いしぶつ}、宝篋印塔^{ほうきょういんとう}、石幢^{せきどう}、板碑^{いたび}、磨崖種子^{まがいしゆじ}などの石造物が多く残っている。これらの石造物からは、往時の人々の信仰をうかがい知ることができる重要なものである。

前津江・中津江・上津江と北東に連なる大山にわたる一帯は、かつて「津江山」と呼ばれていた。津江山は平安時代末から明治時代の神仏分離令まで、福岡にある大宰府天満宮の荘園となっており、大蔵永季や津江地域の在地領主である津江長谷部氏によって大野・赤石^{あかishi}・柚木^{ゆうぎ}・宮園^{みやの}・八所^{やとこ}・中村^{なかつむら}・浦^{うら}・中川原^{なかがわら}に津江七社と呼ばれる7つの老松社^{おいまつしゃ}が建てられた。津江地域は雷が多か

《資料5》

ったことから、雷神の要素も兼ね備えた天神・菅原道真すがわらのみちざねが老松神の名前で、人々に受け入れられていき、今でも信仰されている。

⑤日田の町並みの形成

文禄2(1593)年に大友氏が改易された後、日田は豊臣秀吉の直轄地である太閤蔵入地たいこうくらいりちとなった。翌年の文禄3(1594)年、秀吉の代官として派遣された宮木長次郎みやまきちやうじろうが日隈山に日隈城を築いた。宮木氏は日隈城の城下町として、田島村たしまむらにあった町場を城下に移して隈町をつくった。隈町は三隈川の右岸に築かれ、町の中心でこの三隈川に面したところには瓦屋根の商家が軒を連ねた。また、町の南北には寺院が配置されたほ

日隈城
永山城
古い町並み(隈町・豆田町)

か、東西南北の入口には門が造られ、通行人を規制できるようにしていた。また、現代まで日田で継承されている鶺鴒(県無民)は、この時期に岐阜・長良川ながらがわから鶺鴒匠を4名招いたことに始まるといわれる。

慶長元(1596)年、宮木氏の後に日隈城の城主となったのが、毛利高政もうりたかまさである。毛利氏は、宮木氏の築いた日隈城に修理を行い、天守閣を造ったといわれ、この天守閣は5層6階で、大分県最大級の天守であったと考えられる。

慶長6(1601)年、毛利氏は佐伯に移った後、一時、黒田孝高くろだよしたかが日隈城に入城し、家臣の栗山利安くりやまとしやすが在城して支配したが、後に日田郡北部の夜開郷やけ・渡里郷わたは小川い壱岐守光氏い、南部の刃連郷ゆきひ・石井郷は幕府領で毛利氏預かり、有田郷は森藩領となった。小川氏は月隈山に丸山城を築き、城下町として丸山町を造った。元和2(1616)年になると、譜代大名の石川忠総たが日田に入り、丸山城を永山城と改め、城下町として中城村なかじょうに豆田町まめだまちをつくった。豆田町の中心には南北に走る道路が延びており、上町うわまちと下町したまち通りと呼ばれていた。通りに面して、各町が配置されており、川端町かわばたや風呂屋町ふうりやなどの名前が付いていた。近世の日田の町並みの基礎を築いた隈町と豆田町は、日田が天領となった後、経済の中心地として栄えていくこととなる。

⑥日田代官による支配

寛永10(1633)年、石川氏が下総佐倉に転封となると、日田は幕府の直轄地、天領となった。その後、多くの人物が交代で代官となり、この天領を治めることとなった。代官が政治を行う場所は代官所といわれる。日田の代官所は永山布政所ふせいしよや日田御役所おんやくしよと呼ばれ、永山城のふもとに置かれた。享保9(1724)年に大官となった増田太兵衛ますだたへい以降は、この代官所が九州の豊前ぶぜん・筑前ちくぜん・肥後ひご・日向ひゅうがなどにあった幕府直轄地の支配の拠点となり、江戸よっかいち(現在の宇佐市)・富岡(現在の熊本県)・富高とみだか(現在の宮崎県)にも代官所を作った。

小ヶ瀬井路

延享3(1746)年に馬原騒動まばると言われる百姓一揆しやうが起きた。この一揆は、時の代官である岡田庄太夫だゆうの実施した助合穀銀や年貢増税政策により負担が増大した農民が、馬原村穴井六郎右衛門を

中心として幕府に直訴したものであった。その後、宝暦8(1758)に岡田庄太夫の次男揖斐十太夫が代官となると、明和4(1767)年には西国筋郡代に昇格した。

文化14(1817)年、塩谷大四郎が代官となり、文政4(1821)年に郡代に昇格した。塩谷氏は、現在も利用されている小ヶ瀬井路の開削、隈川・中城川の改修と通船、日田ー玖珠間の道路改修、周防灘沿岸の新田開発などの公共事業に努めた。小ヶ瀬井路の開削には廣瀬久兵衛や草野忠右衛門などが世話人として願い出て、農民や商人などの民間からの出資で実施された。この小ヶ瀬井路ができたことにより、近隣農村の田畑が潤い、干ばつの被害がなくなった。また、文政2(1819)年に豆田町及び隈町にて災害などに備えて米を蓄えておく隠徳蔵を設けた。他にも、目が不自由な人の養育のため、盲人養育田も設置した。

元治元(1864)年に最後に代官に着任したのが、窪田治部右衛門である。江戸時代末の動乱の時期にあったため、農兵隊を組織するなど、幕府体制の維持を図ったが、慶応4(1868)年に四日市にあった代官所の焼き討ちが起き、その報告を聞いた窪田氏は肥後に逃亡した。

⑦天領日田と産業、伝統行事

近世においては、天領であった日田に設置された代官所を起点とした6つの陸上交通道路が使われていた。この交通網を利用して日田には多くの人々が訪れ、豆田町には旅籠や土産用の菓子店が多数あった。陸上交通道路には難所がいくつかあり、掛屋や地域の農民たちが力を合わせて、石畳道や隧道、石橋が造られた。文政8(1825)年に小ヶ瀬井路が完成した後、日田川通船が実現した。豆田町の中城河岸や隈町の竹田河岸から年貢米や特産物が運ばれていったが、それ以外にも、通船は中国から長崎に到来した文物が日田経由で大阪や江戸に運ばれていった。

近世初期に築かれた城下町である豆田町や隈町には、陸上交通を利用して多くの商人も集まるようになり、活発な商業活動が行われるようになった。有力商人には、豆田町に丸屋(千原家)・博多屋(廣瀬家)・伊予屋(手嶋家)・升屋(草野家)・俵屋(合原家)などがあり、隈町に京屋(山田屋)・鍋屋(森家)などがあり、金融業のほか、それぞれ精蠟業、油製造・醤油・酒などの醸造業を広く営んでいた。これらの有力商人の住宅の中には、豆田町や隈町が大火や水害などの多くの災害に見舞われたことから、災害に強い居蔵造と呼ばれる建物構造となっているものもあり、今も豆田町に残る草野家住宅(国重文)などで見る事ができる。

人々の往来が多かった天領日田には、経済だけではなく、産業や伝統行事などといった文化も発展していった。日隈城を築城した豊臣秀吉の代官である宮木長次郎がもたらしたといわれる鶉飼は、江戸時代を通して代官の庇護のもと、川漁として行われるほか、技術を代官たちに披露されてきた。現在は観光鶉飼としてその伝統技術が継承されており、本市の代表的な夏の風物詩となっている。小鹿田焼は、江戸時代中頃に小石原焼(現在の福岡県朝倉郡東峰村)の陶工であった柳瀬三右衛門たちによって開窯された李朝系の民陶である。開窯後の元文2(1737)年に、代官によって許可を受け、以来300年余り伝統的な技術が継承されてきている。本市に今も伝えられている伝統行事に、江戸時代を起源とする日田祇園がある。祇園会自体は古くから行われていたと考えられるが、山鉾が曳き廻されるよう

日田祇園
鶉飼
小鹿田焼

《資料5》

になったのは正徳4(1714)年から、山鉾の台で演奏される祇園囃子は文化14(1817)年頃から始まったといわれている。現在、豆田・隈・竹田などで計9基の山鉾が毎年7月20日過ぎの土日にある日田祇園で巡行し、豪華絢爛な見送り幕などは往時の天領日田の繁栄を偲ぶことができる。

⑧近世の農村の暮らし

農村では、自然災害による飢饉や伝染病が流行することがあり、人々の生活は過酷なものであった。中世に本市を支配した大蔵氏の系譜を引く大蔵永常は20歳前後に経験した大飢饉をきっかけに、九州諸国を転々とし、農民に役立つ作物の栽培・加工方法などを学んだ。寛政8(1796)年に大阪に渡り、苗木商を営みながら、ハゼについて述べた『農家益』という著書を刊行したのを機に、その後多くの農業書を刊行した。天保5(1834)年には田原藩(現在の愛知県)に、天保13(1842)年以降には浜松藩(現在の静岡県)に農業指導者として招かれ、晩年は江戸にて集大成ともいえる『公益国産考』を刊行した。大蔵永常の功績により、日本の農業技術は向上し、永常は日本三大農学者の1人に数えられている。

農村に住む人々は、雨乞いや豊作祈願、無病息災などを神仏に祈るための祭りを行ってきた。今でも秋の祭日に合わせて奉納される楽が本市の各地域で行われている。天瀬町のくにち楽、前津江町の大野楽、三ノ宮町の磐戸楽など、杖を用いたものや河童の所作をするものが伝わっている。他にも、中津江町では中世に起源をもつ的ほがし祭と餅搗祭が伝えられ、大山町では烏宿神社で行われる裸参りが行われている。

江戸時代、日田の山林は、幕府直轄の御用林として確保されていた。相良吉三郎は竹を筏に組んで筑後川を西に下り、川下の地域で材木や竹を売る「竹木旅出商売」をはじめ、日田の林業を大きく前進させた。また、『相良家文書』によると、享保19(1734)年に吉三郎が日田郡入江村に住んでいた兄弟3人を日向国の奈須山の木材伐採の折に派遣し、スギ苗の植え付けや伐採などの方法を学んで帰ったことにより、日田にて本格的なスギの植林が始まったとされている。水運が発達した後、本市への木材需要が高まり、紙の原料となるコウゾやろうそくの原料となるハゼなどによる商品生産も拡大していった。その後、大正時代には日田下駄の生産が増加し、昭和時代には日田漆器や日田家具の生産が増加するなど、「林業の町、日田」と呼ばれる所以が築かれていった。

林業関係

⑨廣瀬淡窓と咸宜園

天明2(1782)年、廣瀬淡窓は博多屋(廣瀬家)の第五世三郎右衛門の長男として生まれた。幼少から父に書道や四書の句読を教わり、10歳のときに漢詩を学んだ。16歳になると、福岡の亀井南冥・昭葉親子の亀井塾に入門し、学問や詩作に励んだが、18歳のときに大病を患い、志半ばで日田に帰った。

文化2(1805)年、24歳のときに教育者を志し、長福寺の学寮で塾を開いた。その後、豆田町

の成章舎^{せいしょうしゃ}や豆田裏町の桂林園^{けいりんえん}などに場所を移し、文化14(1817)年、36歳のときに堀田村に咸宜園を開いた。咸宜園には全国から門下生を集め、嘉永5(1852)年には塾の在籍者が233名となり、最盛期を迎えた。安政3(1858)年に淡窓が亡くなった後も、廣瀬青邨^{せいそん}や林外^{りんがい}などの養子や門下生たちが塾主を引き継ぎ、明治30(1897)年に閉塾するまで咸宜園は約80年存続した。全国66か所から5,000名を超える門下生が集まったことから、咸宜園は近世期の日本最大の漢学私塾といえる。そのため、咸宜園の門下生には、近代日本の夜明けに活躍した人物が多く存在している。

咸宜園跡
廣瀬淡窓に関する文化財

咸宜園では、入門時に身分・年齢・学歴を問わない入門制度である「三奪法^{さんだつぼう}」や毎日の成績評価「月旦評^{げつたんひやう}」などにより、門下生たちを平等に教育していたとされる。咸宜園教育の特色は、長年にわたる教育実践の中で創り上げた教育のシステムにあり、その代表的なものが前述の「月旦評」や「規約(82則)」の作成、塾の自治運営のために門下生に与えた役割の制度「職任^{しやくにん}」、「情操教育」(詩作)などである。

咸宜園跡は、昭和7(1932)年に国史跡に指定、平成27(2015)年には咸宜園跡や廣瀬淡窓に関する文化財等が、「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」のストーリーの一部として日本遺産に認定され、この咸宜園での教育は今も本市の人々に受け継がれている。

⑩日田市の誕生

慶応4(1868)年の大政奉還により幕藩体制が崩壊すると、天領であった日田郡は新しく「日田県」となった。初代日田県知事には薩摩藩士松方正義^{まつかたまさよし}が就任し、町人たちの協力を得て身寄りのない乳幼児を保護する養育館の建設を行った。また、産業を興すため県営の質屋兼両替商的な機能を持った機関である生産会所を設立し、その生産会所を通して郡内で植林や養蚕の奨励、道路や橋梁の修繕、小ヶ瀬井路の改修などが実施された。

明治4(1871)年には日田県は大分県に編入され、明治34(1901)年には豆田町と隈町が合併して日田町となった。その後、昭和15(1940)年、昭和30(1955)年、平成17(2005)年の合併を経て、現在の日田市となっている。

戦時下の日田には日本陸軍の兵器工場が建てられた。当時、九州地方には北九州の八幡製鉄所などの大規模な工場が攻撃の標的となる中、幸いにも日田は空襲を受けることはなかった。月隈山の中には現在も多くの防空壕が残っている。

防空壕

空襲を免れた日田は迅速に戦後復興が行われ、昭和24(1949)年、本市が「重要木工集団地」として、更に翌25(1950)年には「耶馬日田英彦山国定公園」の指定を受け、木材資源を中核とする内陸型産業都市及び観光都市としての性格が打ち出された。

⑪近代産業の発展

明治時代は河川交通が主流であった時代でもあったが、明治36(1903)年に筑後馬車鉄道が開

設され、大正5(1916)年には日田と久留米を走る「筑後軌道」と呼ばれる鉄道が敷設された。その後、昭和3(1928)年に久大本線(現在のJR久大本線)が拡張される中で廃線となり、筑後軌道が久留米-日田間をつないだ期間は15年という短い間であったが、物資の運搬だけでなく、人の動きや文化の流入にも大きな影響を与えた交通手段であった。

日田における産業構造は前近代から変わることなく、林業や木工業が中心のまちであった。その中で、鯛生金山や女子畑発電所などは現在も明治期を代表する文化遺産・産業遺産である。

日田郡中津江村にある鯛生金山の歴史は明治27(1894)年の発見に始まり、明治31(1898)年、採掘が開始された。その後、大正7(1918)年には当時としては類を見ない近代的な設備を導入し、アメリカ、ロシア、アジア各国の人々をハンターとして招き入れて大掛かりな採掘が行われる。そして、新鉱脈の発見もあって昭和12(1937)年には国内第一位の産出量を記録し、「東洋一の産金鉱山」としてその名を馳せた。第二次大戦後は産出量も下降し、昭和47(1972)年に75年の歴史を閉じたが、現在まで坑道や製錬所、石風呂などが残っている。

中川村女子畑では明治45(1970)年に発電所が起工、大正2(1913)年に完成し、日田郡内に広く電力を供給した。この女子畑発電所は、今日の九州電力株式会社の出発点にもなり、現在も大正時代の建造物が残る。

鯛生金山
女子畑発電所

(2)災害史

山間部にある日田は、集中豪雨や長雨が続きと傾斜の急な周囲の山々からの流れが一挙に三隈川に流れ込むため、幾度となく水害に見舞われてきた。洪水による被害の大きさは、古代から日記や記録に残されている。

近年では、明治22(1889)年、大正10(1921)年、昭和28(1953)年に大洪水があり、筑後川3大水害と呼ばれている。その中でも特に昭和28(1953)年6月の大洪水では、日田地方に降った猛烈な大雨によって三隈川が氾濫し、その流れを塞ぎ止めた三隈大橋から激流が市街地に流れ込み、市街の約9割の家屋が浸水したほか、死者行方者19人、流出家屋571軒などの大きな被害を残した。この大洪水の後、三隈川の拡幅などの大規模な改修が行われ、市民の安全が図られることとなった。

しかし、平成24(2012)年、平成29(2017)年にも洪水は発生し、生活や観光に大きな影響を及ぼした。このように、日田に流れる川は人々に恵みをもたらす反面、今日まで多くの被害もたらしている。

水害時写真